

まじめなる

口上

まつもってわたくし見世の儀、おのく様御ひいきあつく
日ましはんしやう仕、ありがたき仕合ぞんし奉り候。

扱、作者京伝申候ハ、たゞ今までかりそめに
つたなき戯さく仕り、御らん二入候へとも、

かやうのむゑきの事に日月および

筆紙をついやし候事、さりとハ

たハけのいたり、殊ニ去春なぞハ、世の中に

あしきひやうぎをうけ候事、ふかく

これらをはぢ候て、当年より、けつして

戯作相やめ可申と、わたくし方へも、かたく

ことハリ申候へ共、さやうにてハ、御ひいきあつき

わたくし見世、きうにすいひニ相成候事ゆへ、ぜひく

当年はかりハ作いたしくれ候やうおたのミ候へハ、

京伝も久しきちいんのわたくしゆへに、もたしかたく

そんしまげて作いたしくれ候、すなハち、しやれ本およびゑさうし

しんはん出来候間、御好人さまハけたいもくろく御らん

の上、御求可被下、ひとへに奉希

寛政三つ亥の春 日

板元 蔦唐丸

以上

まづもってわたくし見世の儀、各々様御ひいき厚く
日増し繁盛仕り、ありがたき仕合わせに存じ奉り候。

さて、作者京伝申候は、ただ今まで かりそめに

拙き戯作仕り、御覧に入れ候えども、

かやうの無益の事に日月および

筆紙を費やし候事、**さりとハ**

たわけの至り、殊に去春なぞは、世の中に

悪しき評議を受け候事、深く

これらを恥候て、当年より、**決して**、

戯作相やめ申すべきと、わたくし方へも、かたく

断り申し候えども、さやうにては、御ひいき厚き

わたくし見世、急に衰微に相成り候う事ゆえ、是非是非

当年ばかりは作いたしくれ候やうお頼み候え、

京伝も久しき**知音**のわたくしゆえに、**黙し**がたく

存じ、まげて作いたしくれ候、すなわち、洒落本および絵草子

新版でき候間、御**好人**さまハ、**外題目録御覧**

の上、御求めくださるべく、ひとえにねがい奉る 以上

寛政三つ亥の春 日

板元 蔦唐丸（つたのからまる）

さりとは…なんとまあ さてさて 黙す（もだす）…黙って見過ごす

決して…きつと 必ず

好人 …人柄の良い人 善人

知音…知りあい 親友

外題（げだい）…題名

蔦屋重三郎（山東京伝） 関連年表

- 1750 吉原で生まれる
- 1756 両親が離婚 引手茶屋「つたや」を経営する喜多川氏の養子となる
- 1761 山東京伝 質屋の養子岩瀬伝左衛門の長子として深川木場に生まれる。13 歳まで深川で過ごす。
- 1772 義兄 次郎兵衛が五十間道で営む茶屋の軒先で、書店兼貸本屋「書肆耕書堂」を開く。 23 歳
- 1773 「吉原細見」の卸や小売りをする
- 1774 「一目千本」を「蔦屋」の名で出版
- 1775 蔦重版「吉原細見」評判となる
浄瑠璃の正本や往来物、黄表紙などで繁盛する。
- 「深川七場所」岡場所が大いににぎわっていた。
- 黄表紙ブーム
- 鱗形屋孫兵衛「金々先生栄花夢」（恋川春町）が評判となり、
鱗形屋が重版事件をおこし訴えられる。
- 1778 京伝、黄表紙「開帳利益札遊合（かいちょうりやくのめくりあい）」の挿絵担当
その後戯作も書き始める。
- 1782 京伝「手前勝手御存知商売物」が太田南畝に認められ出世作となる。
- 1783 日本橋通油町に新たに「耕書堂」を開店。 34 歳
- 1783 「吉原細見」独占。狂歌に目をつけ、「蔦唐丸」として活動する。狂歌絵本発売。太田南畝と知己を得る。
- 1787 松平定信が老中となる（～1793）。寛政の改革
- 1788 「画本虫撰（えほんむしえらび）」出版。絵師 喜多川歌麿の名が広がる。
政治を風刺する読み物がヒット。「文武二道万石通」「鸚鵡返文武二道」「時代世話二挺鼓」等 発禁処分等
（朋誠堂喜三二 藩主から叱責、 恋川春町 隠居後原因不明の死・・・）
- 1790 幕府、問屋・版元に出版取り締まり命令を下す。
- 増補「みだらなことや異説がかかれた本は嚴重に取り締る。好色本は絶版
- 京伝・蔦重 幕府から目を付けられる
- 1791（寛政 3 年） 山東京伝の黄表紙「箱入娘面屋人魚」、洒落本「仕懸文庫」「青楼屋之世界錦之裏」「娼妓絹麗」が摘発され、京伝は手鎖五十日 蔦重は身上半減の重過料が課される。
- 1792 曲亭馬琴が番頭として蔦屋で働き始める。喜多川歌麿の美人大首絵を多数刊行。
戯作制作を断念し、書物問屋として学術関連の書物刊行を始める。
- 1794 東洲斎写楽の役者絵を多数刊行。
- 1796 大首絵の判じ絵禁止
- 1797 脚気により死去。正法寺に葬られる。47 歳